

『陸眼八目』からみるロチのまなざしと日本

— ピエール・ロチの「猿」と飯田旗軒の「猿」—

山下 祐里奈

はじめに

今日までの芥川龍之介研究において「舞踏会」(1920)が語られることは少なくない。*Pierre Loti, Japoneries d'Automne* (1889)に収録されている*Un Bal à Yeddo*に題材を得ていることは明らかになっているものの、芥川が執筆に際し、どの言語から*Un Bal à Yeddo*に触れていたのかについては明確化されていない。*Un Bal à Yeddo*は「舞踏会」が執筆された1920年までに2度の翻訳が行われた。それが飯田旗軒訳『陸眼八目』(1894)と、高瀬俊郎訳『日本印象記』(1914)である。

『日本印象記』については、安藤保雄がこの作品が芥川「舞踏会」の種本ではないか、と次の2点から指摘¹⁾した。安藤はその巻頭、〈解題〉から「彼が、日本を訪れて、此の一篇(原名、「日本の秋」)を書いたのは、明治十九年の秋の末で、彼は其時短い口髭を生やして軽快な海軍の制服をつけた一青年士官であつた。」という一文に着目した。「舞踏会」における「明治十九年十一月三日の夜であつた。」「相手の将校は、頬の日に焼けた、眼鼻立ちの鮮な、濃い口髭のある男であつた。」という文章と照らし合わせると、鹿鳴館での舞踏会が開催された時期、「舞踏会」に登場するフランス人海軍将校とロチの人物描写の2点が一致することから種本であると定義した。このような先行研究から、『日本印象記』は「舞踏会」を分析する上で重要な位置付けにある作品であるとしている。

一方、『陸眼八目』について言及してみると、この翻訳は『日本印象記』と並べてみても芥川の研究史において殆ど比較対象にあがることはなかった。三好行雄は『陸眼八目』『日本印象記』の両作品に対し「粉飾された大づかみの訳本²⁾」と評することで先に述べた安藤の意見を否定した。そして芥川は英訳本によってその構想を得たと論じた。島内裕子もまた、『陸眼八目』について『婦女雑誌』の広告に書かれた「戯訳」という単語に注目し、「芥川龍之介がこの戯訳を読んで参考にしたということは、まずありえまい³⁾」とその可能性を否定した。このように『陸眼八目』は、本における最初の翻訳にも関わらず、訳本として注目されることはなかったのである。

このような『陸眼八目』に対する評価は、訳者による原文にはない自由な翻訳が数多く見られることが原因であるが、それらの文章の大半が文明批評に関する箇所である点

については留意しておきたい。さらにその中でも特に興味深いのは、旗軒がロチ作品群に多く見られる「猿」を用いた表象を、独特の表現をもって作品内で展開させているということだ。

ジョルジュ・ビゴーなどに代表される当時の風刺画において、明治日本を描く際に「猿」というモチーフが、日本国内にとどまらず諸外国においても広く使用されていたことは周知の通りである。日本人に限らず、西洋は近代以降、植民地支配を推し進めていく中で、ダーウィンの進化論、及びその後派生していったスペンサーの社会進化論などの構図を背景に、東洋やアフリカなどの未開の地に住む先住民たちを「猿」と例えるような系譜が存在した。そういった例はロチの日本を題材にした作品群のみならず、様々な作品に典型的な形として表れ、そこには西洋人の未開の地に対するまなざしを伺い知ることができる。

本論文では、*Japoneries d'Automne*がフランスで刊行された、その5年後に日本で発表された翻訳作品『陸眼八目』を比較対象に据えることで、西洋近代化の渦中を生きた飯田旗軒の変化する文明へのまなざしを分析していく。ここにはヨーロッパに接した日本人、飯田旗軒の西洋から東洋に対するまなざしの反応が読み取れるであろう。

1ではまず、飯田旗軒と『陸眼八目』の情報を整理した上で、初出雑誌『婦女雑誌』やから旗軒の随筆集から当時のテキストの位置づけと旗軒の翻訳に対する姿勢を確認する。

2以下の章では、テキスト分析を行う。本論文では「江戸の舞踏会」「人間の料理」「江戸見物」の3作品に絞り比較を行うが、まずは旗軒が翻訳を行わなかった作品について指摘する。その確認を行った上で、『陸眼八目』における翻訳の省略部・加筆部にはどのような特徴が見られるのかを分析する。

3では旗軒の文明批評と評し、旗軒の意識部分から「猿」を使用した文を抽出し、考察する。ここには日本人でありながら西洋近代を自ら経験した旗軒の、西洋人からのまなざしの受容とその差異を示していく。

1. 飯田旗軒と『陸眼八目』

1.1. 飯田旗軒

訳者飯田旗軒は日本銀行をはじめとする様々な実業界で活躍する傍ら、翻訳・随筆の著述に携わった。しかし旗軒についての詳しい情報は今日の研究では殆どなされていない。そこで『陸眼八目』の本格的な分析に入る前に、『日本近代文学大事典』や本人の自伝的随筆集『ごつくばらん』（1917）を中心に、現在知られている限りの情報に寄り

ながら、以下に整理し、まとめておこう。

飯田旗軒は、本名飯田旗郎。別号梅廼舍文江、聴雨居士、眠花道人などがある。旗軒は『ざつくばらん』の「七一 僕の勉学時代」「一七四 僕の通つて来た世の中」において自身の経歴を振り返っている。

1866年両国に生まれ、1879年東京大学予備門に進んだ。しかし脳充血のため1882年中退。1884年の日本最初の高等商業学校の前々身なる前の東京外国語学校附属高等商業学校への入学の間に英語やドイツ語、統計学を学んだ。商業学校で商業学士の御雇教師であったベルギー人、ヴァン・スタッペンと出会い、1886年にベルギーのアントワープにある高等商業学校へ留学。1889年には日本人で最初の商業学士となり、翌1890年に4年振りで帰朝を果たした。また飯田はベルギーの在学中、ドイツやイギリス、フランスなどのヨーロッパを旅するなど、当時の日本人のなかでは特出した海外経験を持つ人物であった。

帰国後は、日本銀行や横浜正金銀行といった実業界で活躍するほか、高等商業学校の教師や東洋移民会社、南米植民株式会社、果てには閑都理倶楽部で植木屋土方と一緒に花や野菜を作るなど、多岐にわたる職業に就いていた。またその傍ら、過去には硯友社社友であったこともあり、時折筆を執ってはロチやエミール・ゾラの翻訳を行った。とくに西園寺公望の序文を載せた『巴里』（1908）は発禁処分になったことで話題となった。

1.2. 飯田旗軒訳『陸眼八目』

*Japoneries d'Automne*の翻訳としての『陸眼八目』の成立事情は少し複雑なのでこれも以下に整理しておこう。

旗軒はまず1892年の『婦女雑誌』第2巻6号、7号、10号、11号、12号、13号の計6回に渡り *Un Bal à Yeddo* の翻訳として「江戸の舞踏会」を掲載した。その3年後、*Japoneries d'Automne* に掲載されている残り8編のうちから6編（「京見物（*Kioto, La Ville Sainte*）」「人間の料理（*Extraordinaire Cuisine de Deux Vieux*）」「日光神山（*La Sainte Montagne de Nikko*）」「江戸見物（*Yeddo*）」「観菊の御宴（*L'Impératrice Printemps*）」、また「サムライの墓にて（*Au Tombeau des Samouraïs*）」は「江戸見物」内に収録）を翻訳したものを加えて、1895年に『陸眼八目』と題して春陽堂から刊行した。

ではロチの *Un Bal à Yeddo*、そして旗軒訳「江戸の舞踏会」が当時どのような認識にあったかを確認していく。掲載雑誌『婦女雑誌』第2巻第6号に、飯田の連載にあたっ

ての文章が以下のように紹介されている。

新年以来本誌に連載して頗る喝采を博したる若水ハ末だ前号にて完結せしにあらねど右著者漣山人にハ此程祖母の君の喪に丁りて俄に京都に赴かれたれば已むことを得ずて一回休掲することゝなしぬ、その代りにハ眠花道人飯田旗郎君が戯れに訳されたる斬新奇妙諷刺滑稽の新小説江戸の舞踏会を繰り上げて本号より掲載なすべければ左の序文よりして順次御笑覧の上愈まし御喝采下され度候

ここでは当時から「戯れに訳されたる」という認識のもと掲載された翻案的なテキストであったことが主張されている。また、「斬新奇妙風刺滑稽の新小説」が当時のロチ作品に対する捉え方であったこともここで窺い知ることができるであろう。

「新小説」という表現から、この「江戸の舞踏会」はヨーロッパ人が日本という東洋をエキゾチックな目で眺めているだけの単なる紀行随筆にはとどまらなかった。そこには「風刺」に評されるような文明評的な、つまり海軍将校という立場にあったロチの、日本の在り方に対する政治的な要因を読み取っていたのだろう。そしてそれは「滑稽」という言葉にあるように日本人の姿が一種戯画化されているように見ていたかもしれない。つまりここにおける「斬新奇妙風刺滑稽の新小説」というのはおそらく、日本人にとって客観的に見た自らの姿に違和感を覚えるような新しい読み物として捉えられたと言える。

続けて『陸眼八目』発刊に際し掲載された「自序」を確認しよう。

本編載するところは、氏が著『秋の日本風物』と題する一書に基づくもの。訳者彼地に在るの日之を読んで愛玩借かず。言実往々其当を得ざるものありと雖も、おかめ八目の見評真に当れるものなきにあらず。即はち採つて以て戯に之を翻述す。

先に触れたように旗軒はベルギー留学していたが、その際フランスに旅していたことも記しており、ここでいう「彼地」というのはヨーロッパと捉えていいだろう。*Japoneries d'Automne*に書かれた事柄は、旗軒にとって見当外れの納得できないものもあったにせよ、その全てが的外れなものではなかったもので、親しんで読んでいたと記されている。

旗軒はロチの文章をタイトルの通り「おかめ八目」であるとした上で、それを「戯に」翻訳したのである。言うなればロチが描いた西洋からのまなざしを、第三者からの冷静

な判断であるとした上で、その西洋近代へ倣おう、追いつこうとする日本への文明批評を取り入れたということである。「戯に之を翻述す」ということは、むしろ旗軒が *Japoneries d'Automne* に対し客観的な態度を以て翻訳に当たっていたと見ることができる。

では旗軒の翻訳に対する姿勢はどのようなものであったか。『陸眼八目』というタイトル付けやそれを「戯作」と気取っている態度に反し、翻訳意図に対してはかなり真面目なものがあり、旗軒の翻訳に対する態度はそう不真面目なものではなかったと考えられる。それは随筆集『ざつくばらん』「一四〇 室を食べろ、何にも無い！」からも読み取ることができる。

其昔し某大家が西洋人の客招をした時に「サア何卒彼室へいらつして、あがつて下さい、何にもありませんが」といふ、それを直訳の英語にして *Eat next room, there is nothing.* と云つたので、之を云はれた外人は変な顔をして、いろゝに考へたが、側の人から日本語風の礼譲ある且つ直訳的の言方だと説明されて、首肯したといふ話がある、これは直訳と意識の間違だ。

かういふ風に、日本の言ひ方が虚礼に過ぎてゐるから、翻訳は中々難かしい、或人が翻訳は創作よりも難かしいと云つたのも即ち此辺の事を云つたもので、有理な言である。

(中略) 真正の訳は本当に難かしいものである。

ここで旗軒は直訳と意識の違い、そしてその問題について言及した。また中略部分ではエミール・ゾラ『金』の本文冒頭をフランス語原文、自身の日本語訳、ヴィゼテリーによる英訳、ワレンによる米訳の4つを並べることで翻訳の難しさを語った。飯田は著者原文の他に2種類の英訳を確認するなど、翻訳に対して丁寧な作業を行っていたことが確認できる。こういった作業から『陸眼八目』の翻訳は「戯れに訳された」なおざりなものではなく、冷静で客観的な目を持っていたと言えよう。

また、『ざつくばらん』では以下のような記述もみられる。

僕は先年ピエール、ロチーの『秋の日本』の一部を訳出刊行して(書名おか目八目春陽堂出版)原著者に贈り、而して次に刊行さうと思つてゐる同氏著『阿菊夫人』訳本に掲ぐべく、同氏の序文を請うた、同氏は直ちに序文を寄稿し、尚且つ自影ま

でも與へられ、のみならず、同時に同氏一切の著述の翻訳権を與へられた、

ここではロチに『陸眼八目』を贈ったとあり、またロチの一切の書物に関する翻訳の権利をもらっていることが記されている。著者本人に贈る程度には真面目に翻訳したと考えられ、ここでも旗軒の*Japoneries d'Automne*翻訳への真面目な姿勢が見て取れるだろう。

また旗軒はロチの著述そのものにかかなり冷静にあたっており、ただ単に信奉したり、逆にすべてにに対し批判的になっていたわけではなく、客観的に見ていたと捉えられる。それはロチの日本語理解についての描写から確認できる。

茲に又余の思ひ掛けもなき不都合を感じたるは、踊るの諸嬢より何か話しかけられたる日本語を聞き取る事の叶はざるにあり、読者よ、余が此山水明媚なる日本に到着したるは、マダ昨日今日と数ふる程にて、日本語を習ひ覚へんと試みたるは、(後略) (70)

引用はロチの原文にはない、旗軒の加筆部分に当たる。見る限り、ロチの日本語能力はほぼなかった。このような記述を付け加え、ロチの日本語能力を強調することにより、ロチがどこまで日本について理解していたのかという旗軒の懷疑がここに示されている。

このような旗軒の翻訳に対する態度から、三好や島内が述べるような「戯作」であったとは考えにくい。むしろ西洋を経験した日本人である旗軒のまなざしは、極めて冷静で客観的なものであったと言える。ロチを信奉するわけでもなく、そのすべてを批評するのでもない。そういった視線は、旗軒の意識という方法を以て作品内に反映されている。タイトルの『陸眼八目』とは、ロチの日本へのまなざしだけでなく、旗軒もまた*Japoneries d'Automne*に対して一種「おかめ八目」的な立場にいたと言えるのかもしれない。

2. 翻訳の傾向

では、翻訳に誠実な姿勢であった旗軒の『陸眼八目』という「戯訳」は、こういった意図をもって書かれたものなのだろうか。*Japoneries d'Automne*には9作品 (*Kioto, La Ville Sainte, Un Bal à Yeddo, Extraordinaire Cuisine de Deux Vieux, Troilette d'Impératrice, Trois Légendes Rustique, Au Tombeau des Samouraïs, La Sainte Montagne de Nikko, Yeddo, L'Impératrice Printemps*) が収録されているが、『陸眼八

目』では「京見物」「江戸の舞踏会」「人間の料理」「日光神山」「サムライの墓にて」「江戸見物」「観菊の御宴」の7作品のみが取り上げられ翻訳されている。高瀬訳『日本印象記』をみても、収録作品は5作品にとどまっており、9作品全てが翻訳されるのは1942年に刊行された村上菊一郎訳『秋の日本』に至るまで見当たらない。*Troilette d'Impératrice, Trois Légendes Rustique*は旗軒によって初めて日本語翻訳がなされてから約50年にわたり手が付けられなかったのはなぜであろうか。

まずは比較分析の前に旗軒が翻訳に至らなかった2作品について検討を進める。これら2作品はなぜ旗軒の翻訳から落とされたのか。この作品群の共通点は2点ある。

第一に、話の舞台がすべて「田舎」であるということだ。*Troilette d'Impératrice*では、『八幡』宮にある神功皇后の御装束を見学しに行くロチが描かれているが、その道のりは、*il faut faire plusieurs lieues, en char-à-bras, dans des campagnes vertes, tranquilles, solitaires, sillonnées par des chaînes de collines basses qui les découpent en petites vallées innombrables et pareilles.*（人力車で長い距離を走る必要があった。緑の、ひっそりとした、人里離れた田野の中を。おびただしい、同じような小さい谷々の中に切り抜かれている、小さい丘の連なりを縦横に走っている、あの田野の中を。）であり、「人里離れた」や「田野」からもわかるようにロチが向かった場所は「田舎」と言って差し支えないだろう。

*Trois Légendes Rustique*では、タイトルから「田舎」という単語が使われているが、その冒頭は*Ceci m'a été conté, par madame Prune* ;（これはたしかお梅夫人が私に話してくれたものだと思う。）と始まる。お梅夫人とは、ロチがお菊さんと長崎で暮らしていた家の家主の奥さんのことである。つまり「田舎」に住む人間から聞いた「田舎」の短い3つの話をまとめたものである。

*Japoneries d'Automne*の中でロチは日本の近代化への皮肉と同時に、たびたび伝統的な日本への称賛を口にする。そういった近代と伝統の対比描写というのは「田舎」よりも江戸や京都といった近代化の進んだ街の見聞録により濃く描き出される。

また第二に、説明的な文章の削除が言えるであろう。旗軒は「京見物 其七」において「譯者曰 原文には之よりタイコーサマの宮城に就き詳細なる記事あり又二條の御所其他に付きて見物評を掲げたれども、茲には之を畧す」とある。旗軒が「京見物」で省略した箇所を確認すると、どちらも内部の様子を細かく記載されているものであった。翻訳落ちした*Troilette d'Impératrice*を見ても事物に対する細かい説明や歴史的事実を語る、などといった文章であった。また旗軒の翻訳された作品はいずれも、ロチがその土地で出会った日本人たちへの観察眼が含まれているのに対し、これらの作品には含ま

れていない。

このような2つの共通点と、前章で引用した「斬新奇妙風刺滑稽の新小説」という評価から考えてみても、ロチのまなざしが風刺的に捉えた日本というものをより際立たせていたのが、旗軒の翻訳した作品群であったと言えるのではないだろうか。

これより旗軒翻訳における加筆部の分析を行うが、本論文では「江戸の舞踏会」「人間の料理」「江戸見物」の3作品を用いることとする。「江戸の舞踏会」では旗軒独特の「猿」表象が見られる。「江戸見物」では「猿真似」という意味が一層強いsingerという単語が作品内で唯一使用されており、ロチの西洋近代化を推し進める日本へのまなざしが殊に読み取れるであろう。そして「人間の料理」は安藤が芥川「舞踏会」の種本であろうと論じた『日本印象記』には収録されなかった作品である。また、この作品では少女たちが所謂五右衛門風呂で湯浴みをする様子が、彼女たちがスープにされるのではないかと勘違いする様子が描かれている。これはマルコ・ポーロ『東方見聞録^{iv}』にもみられるカニバリズム的な要素が埋め込まれている。つまり当時ヨーロッパですでに流通していた日本イメージが顕著に窺い知ることができるであろう。以上の理由から本論文ではこの3作品に焦点を絞り、分析考察を進める。

旗軒の翻訳における加筆部では、その多くに「読者よ」という呼びかけが用いられる。「江戸の舞踏会」では27回、「人間の料理」では2回、「江戸見物」では16回使用され、その頻度と加筆部の多さがわかるだろう。では、このような呼びかけはどのような意図で使われているのだろうか。ここでは3つの役割に分類した。以下引用と共にこの3点について確認していこう。

まず1つ目は、補足の役割である。

「江戸見物」

読者よ、急行列車と雖も欧羅巴の急行列車とは其速度を異にせるを思はざるべからず、先づ列車の大きさと云ひ、速度と云ひ、吾が佛蘭西の土コービル氏の軽便汽車か、若しくは少し早き蒸気鉄道馬車に乗るたる心地す (136)

彼等が動き得る二三の仕業あり、則ち前に在る箱の引出より煙草を摘み出して、之を一メートルもあるべき赤き煙管につけ、吹かす事と、箱の中より白粉を塗る刷毛を取出して顔の化粧をする事との二なり、読者よ、欧州にて化粧をする事は必ず人の見ぬ場所にてなすを普通の作法となすに、今茲に在る婦女子は公衆の目前

然かも照返しランプの前に於て平然となせり、抑も化粧をするは天然に己れの美貌ある事を人に示さんが為なり、故に秘密に之をなすを要す、然るに此邊の婦人は人の前に化粧を取繕ろいて、私は化粧をした為に此の如く奇麗で御座いと言はんとす、不思議と云はすして何ぞや (183)

『陸眼八目』は *Japoneries d'Automne* の翻訳作品である。つまりロチが書いたものという枠組みの中で、旗軒によって加筆された「読者」とは西洋人のことを指す。しかし『陸眼八目』の実際の読者は日本人である。この矛盾を解消するために、旗軒は状況を詳細に語るという手法を行った。旗軒は上の引用では、比較対象を加筆示すことによって、両文明の差異をロチの視座からうまく説明した。下の引用では、日本人が読む分には不思議と思わないが、西洋人であるロチから見るとおかしい行動と思われる部分に対する補足説明が行われている。欧州の文化を描き加えることによって、日本人の読者は正しくロチのまなざしを理解し得ることができだろう。

2つ目は、心情の追加である。

「江戸の舞踏会」

Dix heures et demie : entrée des princesses du sang et des dames de la cour. Par exemple, c'est une entrée surprenante, celle-ci, autant qu'une apparition de gens d'un autre monde, de gens tombant de la lune ou bien de quelque époque perdue du passé. (90)

(十時半、皇族血筋のお姫様方、ならびにその侍女たちの入場。どうやら、それらは思いがけない入場であり、別世界の人々か、月から降りてきた人々か、あるいはある過去の消え去った時代の人々が出現したかのようであった。)

十時半…余は実に驚きたり肝潰れたり魂消へたり…読者よ月世界の人間が出現したり…此世の外の美人が天降り… (55)

「江戸見物」

— et aussi alentour, dans le grand parc vide et noir où commence une nuit de gelée. Il y a pourtant une cigale, en enfance sénile probablement, qui chante encore on ne sait où. (299)

(そしてまた、周囲の寂しい暗い大きな公園には、霜の夜が始まりかけている。

それでもおそらく老人たちの子供時代にもいたであろう一匹の蟬が、まだどこかで鳴いている。)

読者よ、此の如く妙に食し妙に感じ以て精神が如何なる感想を引起すか考へよ、況して公園、今は人去りて氷結ぶばかりの夜寒、肌は衝かれ、唇は冷え、鬱々たる草の葉に泣く虫は哀し気に我々の耳をたゝくなり (175)

ここでは、「余は実に驚きたり肝潰れたり魂消へたり」や「肌は衝かれ、唇は冷え、鬱々たる草の葉に泣く虫は哀し気に我々の耳をたゝくなり」など、原著にはない表現をロチの心情として付け加えることで、見聞録を『婦女雑誌』の広告にあったような「新小説」として変換したと考えられる。

3つ目はロチのまなざしを借りた旗軒の文明批評という役割だ。これは主に「江戸の舞踏会」で多く見られる。

「江戸の舞踏会」

読者よ今一層注意して察すべき事あり、凡そ世界各国の風俗習慣は、皆其国々の古代より、其国土人情に適するやう、先賢先哲の工風したる者が、世を累ね代を積むに従つて次第々々に発達し、其国其時の人が最も目に麗しく、耳に面白く思はるゝに至りて当世の衣装となり、又当世の流行となることを、然るに日本一般の社会は未だ高帽を其頭に美となさず、未だ燕尾服を其身に適せると為さず、未だ西洋音楽を其耳に面白しと為さるのみならず、却て之を奇とし妙として後指さす程なるに、今や此一流の紳士貴女は日本固有の美術を放擲して生中に一般の耳目に怪まるゝ欧羅巴風の新风俗に倣ふに至れり、読者は(中略)余は一々之を熟視して実に日本人の物真似に巧みなるに感心し、又其固有の美風を失ふを遺憾に思へり、日本女子の束髪、日本男子の高帽、みるものもゝ、実に奇々妙々にて、如何に過激なる欧羅巴の破壊党も、日本の上流人が其固有の美風を破壊してこの奇々妙々の異国風を為すが如き過激なる破壊党には舌を巻くしと察したり (40-41)

読者よ、日本軍人が其軍服を欧羅巴風にせしを見て一口に物真似と思ふ可からず、何となれば日本の婦女の欧羅巴風を学ぶは虚飾なり、日本軍人が欧風に倣ふは、十九世紀の軍略部法に於て須らく然かせざるを以てなり、日本の軍人は、其服装を欧風にすると共に、其軍律其葦も皆欧風となし、平生の作法調練等、都て欧羅巴各

国の軍人と肩を並べて恥しからぬ者なり (63)

どちらも「物真似」というロチが日本に対して頻繁に使用する単語を用いることで、ロチからのまなざしへの反論、批評を行っている。旗軒のこういった文明批評に関しての詳細は次章で追うが、このように旗軒は加筆した意識部分で西洋からのまなざしを逆手に取ることで文明批評を行っている。

旗軒は意識を行うことで、読者である日本人がロチの見聞録を小説として、より身近に楽しめるようにした。また原著の文章に対し、さらに細かな背景描写を加えることで、小説という体裁に近づけたとも言えるだろう。同時にロチがたびたび使用する手法を取りながらも、その意味を本来のものとは真逆に作用させた。つまり、旗軒にとっての加筆による意識部分は、読者への配慮とロチが捉えた近代化する日本へのまなざしに対する批評であり、それは同時代をヨーロッパで過ごした旗軒だからこそ成しえたことである。

3. 飯田旗軒の文明批評

旗軒の翻訳の加筆部において文明批評が行われていたことは先で述べた通りだが、本章ではその中でも「猿」というイメージを用いた表現を取り上げていく。ロチは日本を舞台にした作品群において「猿」を使った表象をたびたび行っている。それは日本人の容姿を例えたものに限らず、その行いすらも「猿真似」と称しており、「猿」を用いた比喻はロチの作品の中で大きな特徴のひとつであることは明白である。そこには西洋／非西洋、また、文明／非文明・未開といった枠組みが存在することはこれまでの研究史で幾度となく指摘されてきた通りである。

ではこういったロチからのまなざしを旗軒はどのように受容し、『陸眼八目』の中で昇華していったのだろうか。

Du reste, les seuls voyageurs en ce moment sont quatre touristes anglais, deux gentlemen grisonnants, aux allures comme il faut, et deux misses d'un âge mûr. Hautes de six pieds, et d'une extrême laideur, elles sont habillées dans des espèces de guêrites en mousseline blanche qui laissent saillir tout autour de leur taille des baleines rêtives. A mes yeux déjà habitués aux gentilles guenons japonaises, elles apparaissent comme deux grands singes mâles qu'on aurait costumés pour quelque représentation à la foire. (22-23)

当時此家に宿泊する旅客は余を除きて僅かに四名の英国人二夫婦、上品なる人柄の家族、去れども我が已に日本純粹の美術的服装容色を見、人形の如き愛らしき人種を見慣れたる眼には、恰かも二対の大猿が縁日の見世物に人間の着物を着せられて人中へ出されたる如く、其醜さ加減は我ながら驚きたり（15）

*Kioto, La Ville Sainte*でロチは「着物を着」た「上品なる」「英国人」を猿として例えている。一方で日本人に対しては「人形の如き愛らしき人種」と残している。つまりロチにおける「猿」表象とは、単に文明国フランスから未開の地日本に対する野蛮性や非文明への評価という訳ではなく、不相応な行為に対する評価であるということだ。

では、そういったロチからのまなざしを受容した旗軒の「猿」表象はどうであろう。

此茶番狂言に集り来る多数の日本貴婦人紳士達は、大臣大将、文官、武官の方々過半を占めて皆何れも得意の色其面に溢れたるを見る、（中略）余は試に日本の上流社会に向て問はん、（中略）諸君は暫く余に言論の自由を許せ、余は今外面より公平に諸君を評せん…是が本に猿の物真似と…シテ又爰に集まり来りし貴婦人達なり…婚姻前の盛りの令嬢…年増盛りの艷麗はしき御新造…世帯ジミたる考へ深き母御達…壁の根に列ねたる椅子に倚りたる数多の貴婦人…余は思はず噴出したり、余は実に驚きたり、余は誠に奇怪に感じたり、如何に其身に不似合なればとて均しく人間の着る衣服なるに、是程までも不始末なるか…何処に如何なる所ありて斯く迄に不釣合なるか…不出来なるか…不格好なるか…箇様に頭から爪先きまで一切の具合が狂ふやうに…はまらぬやうに…可笑なやうに…噴出す様に…道化演劇のチヤリやうに…粧ひ飾るにも又随分骨の折れたる話にて、若し是丈けの不格好が無造作に諸夫人の御身に出来得るとすれば、実に不思議なり、実に奇怪なり、（51-53）

中にも一人の心配顔したる中老の一役人は、余の顔を眺めつゝ、物言いたげな風軀、今其胸中を察すれば大方左の如くならん

貴郎は私を馬鹿にして居るだらう、然しそりゃいけないぞ、夫りゃ無理だぞ、己も斯う云ふ仕たくはないが、命令だから何うも仕方がない、洋風が似合はないのは己も知つて居る、可笑しくつて猿の物真似と見へるのは知つて居る、然しどうも命令だから…（130-131）

読者よ、余が此山水明媚なる日本に到着したるは、マダ昨日今日と数ふる程にて、

日本語を習い覚へんと試みたるは、初めて長崎の港に着したるとき雑貨売る小商人や半天股引の人足共位にて、今夕日本上流社会の方々が綺羅と列ねて雲集したる此鹿鳴館の舞踏場に於て、位高き貴婦人令嬢など、言葉を交すが如き日本語に非ず、故に一二聞き覚へたる言葉の口先き迄は浮び来れ共、其儘又口内に封じ込み、終には之を腹内に埋葬する事屡々なりし…去ながら精一ぱい上等の言葉を持ちひ、どうかして出来得る丈けは話、爰ぞ一番もて、呉んずものとは普通の人間の欲心…正逆猿のやうに手真似計りしても居られず… (70)

しかし、最も注目すべきは以下の引用である。原著に一切登場しないダーウィンという言葉を使い、当時の西洋が生み出したチャールズ・ダーウィンの進化論を逆手に取り、「猿」と称され、未開のレッテルを貼られた日本を肯定した。

「江戸の舞踏会」

Ces costumes qu'elles portent, on ne les a jamais vus nulle part, ni dans les rues d'aucune ville japonaise, ni sur les écrans, ni sur les images; ils sont, paraît-il, de tradition immémoriale pour la cour et ne se montrent point ailleurs. (90)

(彼女たちが着ているこれらの衣装は、日本の都市の街路にも屏風にも、どこにも存在しない。それらは宮廷の遠い昔からの伝統であり、よその場所では見られないだろう。)

十九世紀の俗世界には、滅多に…稀に…不思議に…見絵草子に未だ一度も書かれたる事のなき仕立なり、蓋し吾々の想像の届かざるダルウキン氏の人間が未だ猿でありし頃の大昔し、日本の一部では行はれしものが、十九世紀の今日迄傳はりて此鹿鳴館に現はれたるなり… (56)

「江戸見物」

Donc, c'est dimanche aujourd'hui et on s'en aperçoit parfement : ils commencent à singer nos allures et notre ennui de ce jour-là, ces païens. C'est surtout la mauvaise manière qui leur a servi de modèle, à ce qu'il semble, car beaucoup de boutiques sont fermées et beaucoup de gens sont ivres. (272)

(なるほど、今日は日曜日である。そして我々は完全に気づいてしまった。彼らは、この異教徒たちは、この日の我々の振る舞いや退屈を真似し始めたのだ。見た

ところ、彼らが手本にしたのはとりわけ悪い方法のようであった。というのも、多くの店が閉まっており、多くの人が酔っぱらっているからだ。)

本日は日曜日と云ふ、東洋の日曜日は西洋の日曜日と其室を異にするかと思へば、敢えて然らず、同じく日月火水等七曜日の一日を取つて安息日となすこと耶蘇教国の如し、彼等日本国民は余々の習慣を真似て採用せり、此八百萬の偽神を祭りて信心する日本の民草は、同じく日曜日休息の慣習を採り、(中略)嗚呼、日本人は真似好きの人民かな、然しながら実に猿の物真似、日本の性質は猿に近きか…ダルウィン氏は人類は猿の進化せるものなりと云えり。日本人の性質はダルウィン氏の説を証明し得るべきか、真似ると云ふ進取の氣象を示すものなり、猿は此氣象性ありてついに人間とまで進化せり、是に由りて之を見れば、粹を蒐め奇を拾ひて、眞に完全なる一文明開化を創始せんか…

「江戸の舞踏会」からの引用では、「人間が猿でありし頃」には、すでに日本には人間がおり、そしてその時代に行われていたものが現代に脈々と受け継がれている、と肯定的に意見している。旗軒は、ロチはたびたび日本の伝統的な文化へ称賛を送っていた点も考慮したのだろう。

また「江戸見物」では、ロチ原著を確認すると、*singer*という「猿真似」という意味合いが特に強調された単語が使用されており、ロチの西洋近代化する日本へのまなざしが殊に示されてると言つてよいだろう。そのような文章に相手のまなざしをしっかりと受容した上で、「猿」を利用した意趣返しを行った旗軒もまた、ここに大きな意図を持っていたに違いない。ここでは、「日本人は真似好きの人民かな、然しながら実に猿の物真似、日本の性質は猿に近きか、」と肯定した上で、その「猿」もいずれは一文明を築き上げるだろうと、進化を約束している。

このようにロチのまなざしを咀嚼しながらも、真つ向から向き合ったのだろうか。旗軒は『ざつくばらん』「八 理屈張りの文明と靈的文明」にて以下のように述べている。

汽車無いや電車内や否公けの道路でさへ、上着を脱いでシャツや襦袢一枚になつて人を屢く見懸けるが、そんな行儀の悪い風は文明人では日本人ばかりだ、西洋人は一步戸外へ出れば客に行つたものとして、公に対して礼を守る、それが日本では反つて反対、思へば恥かしいことである。

「そんな行儀の悪い風は文明人では日本人ばかりだ」とあるように、旗軒の意識の中では日本人とは文明人であった。西洋を自ら経験した上で出した結論であろう。旗軒のダーウィンを利用した翻訳は、日本人を文明人とした上で、ロチのまなざしを受容し昇華させるための方法であった。このように旗軒は、ロチのまなざしのすべてをそのまま享受するのではなく、それを利用した上で、変わりゆく明治日本を描いたのだ。飯田旗軒はピエール・ロチの描く「猿」を包含し、新たな形の「猿」を描くことによって自身の価値観を紡いだ。

おわりに

飯田旗軒訳『陸眼八目』は、その翻訳の自由さから芥川龍之介「舞踊会」の研究史において殆ど名前があがることがなかった。しかし旗軒の翻訳はむしろ丁寧な、客観的に当時の日本を捉えた本質的な翻訳であったのではないだろうか。ロチと同時代を生き、ヨーロッパを経験した日本人の旗軒もまた、日本を「おかめ八目」の立場から描いた *Japoneries d'Automne* を、ロチとは一線を画す「おかめ八目」の立場から翻訳していたと言えよう。

そしてそのような旗軒の「戯訳」には多くの思案が隠されていた。本論ではまず、翻訳されなかった作品について、ロチの意図して描く日本を強調するために外したのだと推測した。その上で、翻訳された作品に加筆された部分の分析を行い、3つに分類した。そこからは読者への配慮と、ロチが捉えた近代化する日本へのまなざしに対する批評が浮かび上がってきた。「新小説」と銘打ち、ロチの見聞録を読者がより身近に楽しめるようにした。また原著にさらに細かな背景描写を加えることで西洋の文化に馴染もうとした当時の日本人読者も惹きつけたのではないだろうか。それと同時にロチがたびたび使用する手法を取りながら、そのまなざしを真っ向から受けたうえで、そこから日本の行く末への希望を描いた旗軒は、同時代をヨーロッパで過ごしたからこそ成しえたことではないだろうか。その経験こそ今回の翻訳で最も特徴的である進化論を使った意趣返しに繋がったのであろう。

『陸眼八目』は、たしかに翻訳という意味では「戯訳」かもしれない。しかし、これは飯田旗軒にしか書きえない、近代化の渦中を生き抜いた、海外を経験した日本人を知ることのできる、大変重要な資料であると位置づけることが出来るだろう。

註

本文引用は仏文をPieere Loti *Japoneries d'Aoutomne*, Calmann-lévy (1889) より、

日本語文を飯田旗軒『陸眼八目』春陽社（1895）からの引用とする

なお、仏文に続く括弧内の訳のみ拙訳とする

- i 安藤保雄『芥川龍之介』西東社、1956年
- ii 三好行雄『芥川龍之介論』筑摩書房、1976年
- iii 島内裕子「『舞踏会』におけるロティとヴァトーの位相」『放送大学研究年報12』、放送大学、1994年
- iv *Maiz tant vous en diray que, se il avient que ceulx de ceste isle et de toutes les autres prennent aucun leur anemi et il ne se puet racheter de monnoie, si [semondra] cellui qui aura l'omme pris tous ses parens et ses amis et prennent cel homme et l'occient et le cuisent et le menguent a grant feste et font la meilleur char du monde la char de l'homme. (Pierre-Yves Badel , éd. et trad., Marco Polo La Description du monde, Paris, Livre de Poche, 1998, p.386)*

（ただ私がしっかりとっておきたいのは次のことです。この島あるいは他の島々の人々は皆、捕まえた敵の身代金が払われない場合、敵を捕らえた者は親類や友人を呼び集めると、みんなで敵を取り押さえ、殺して、料理した後で、大きな宴会を開いてそれを食べてしまうのです。彼らにとって人肉はこの世で一番の御馳走なのです。）

（やました・ゆりな 本学大学院博士課程後期課程）